

(実践報告)

# 小児看護学実習におけるベッドからの転落予防に対する学生の意識 — 講義・演習に KYT を導入して —

山下真紀<sup>1)</sup> 菅原隆成<sup>1)</sup>

## 1. はじめに

入院中におけるベッドからの転落は、年齢・対象を問わず起こりやすい事故である。特に、小児用の柵付きベッド（以下サークルベッドとする）を使用する小児においては、子ども自身も付き添う家族も、不安の中で不慣れなベッドを使用することとなる。サークルベッドはベッドの長辺の柵を最下段、中段、最上段と上げ下げすることで、子どものベッドからの転落事故を防ぐという特徴のあるベッドであり、入院時に使い方の説明を看護師から受けているが、ベッドからの転落はあとをたたない。

小児におけるベッドからの転落を予防するには、子どもの認知発達段階の特性からくる危険予知能力の未熟さや、身体運動機能の発達状況といった子ども自身に起因する事故の起こりやすさを理解するとともに、使用するサークルベッドの特徴や対象となる子どもの療養環境を十分に理解することが重要である。さらには、実習中の事故を予防するためには、学内における教育として、危険予知力を高めることが必要である（松下, 2013）。そこで、演習科目である小児看護学演習において、サークルベッドを使用した子どもの療養環境についての危険予知トレーニング（Kiken Yochi Training:以下KYTとする）を導入したところ、実習時に学生のベッドからの転落事故予防に対する意識の向上が見られたため報告する。

## 2. KYTとは

KYTは、元々工事や製造などの作業に従事する作業者が、事故や災害を未然に防ぐことを目的に、その作業に潜む危険をあらかじめ予測し、察知できる能力を高める訓練として開発された手法である。事故の要因として人間の行動特性に起因するヒューマンエラーに着目し、エラー要因に気づく能力を身に付け、安全性の高い行動へ応用していくことを目的としている（日本病院管理機構）。一般的には、①現状把握、②本質追求、③対策の樹立、④目標設定という4段階の問題解決手法を用いて、現場の状況や作業を描いたKYTシートを使い、現場の中にひそむ“危険要因”とそれが引き起こす“現象（事故の形態）”を5人程度の小グループで話し合いながら進めていく。

## 3. 講義・演習の実際と学生の気づき

### 1) 講義内容

小児看護学演習第1回において、①子どもと家族にとって、安全で安楽な療養環境を理解できる、②入院生活において起こりやすい事故を理解し必要な環境調整を考えることができる、の2つを目標に、小児の療養環境と事故予防の講義を行った。講義内容は、小児の療養環境として、病気・入院が子どもに及ぼす影響と、そこにおける看護師の役割の1つとして事故予防があることを説明した。さらに小児の特徴として事故が起こりやすい要因と、小児の安全を阻害する因子を説明した。そのうえで、病院で起こりやすい事故を紹介し、それらを予防するための注意点について説明した。また、視聴覚教材として、京都科学による「臨床で役に立つ小児看護技術 第4巻 子どもの安全を守る技術」を紹介し、視聴することを課題とした。

---

1) 朝日大学保健医療学部看護学科

## 2) 演習内容

グループワークによる演習を検討していたが、今年度は新型コロナウイルスによる感染拡大の影響を受け、すべての講義・演習が配信による遠隔授業となった。そのため、個人による検討を行った。

学生が状況をイメージしやすくするため、看護過程の展開を行う事例と同じ、2歳10か月の男児が気管支喘息にて入院している事例を用いた。酸素マスクを使用し、左手背には点滴をしている状況であり、入院3日目ですっきりしてきたことを情報として提示した。児が午睡をしているため、母親が売店に出かけた場面として写真1の詳細な説明を提示し、①危険となる事象(箇所・物など)、②危険となる理由と起こり得る事故、③事故を予防するための対策の検討を行った。記録用紙には、3か所の検討を行えるようにしていたが、学生には必要に応じて記録用紙を追加し、気づいた点について記入するように説明した。



写真1 KYTに用いた状況

## 3) 学生の気づきのまとめ

学生が提出した事故予防の課題を概観すると、以下の3つの視点で検討していることが分かった。

### (1) ベッド柵の高さについて

一方のベッド柵が中段のまま母親が離れていることが危険であるととらえていた。母親不在の状況で午睡から目覚め、母親を探してベッドから降りようとして転落する可能性があるとし、母親に対してサークルベッドを使用する際の注意事項を改めて説明することを対策としていた。また、母親に対して、ベッドサイドを離れる際には看護師に声をかけてもらうように伝えることを記載している学生もいた。

### (2) ベッド内の環境について

ベッド内におもちゃが散乱しているため、児が踏んだ際に外傷につながることや、机などを踏み台にしてベッドから転落する可能性があり危険であるととらえていた。母親に対して、ベッド内の整理整頓をするように伝えることを対策としていた。

### (3) 留置物について

点滴ルートおよび酸素マスクのチューブに関連した、事故抜去およびルートの絡まりによる窒息などの危険があるととらえていた。固定を確実にすることや、児に対して触ってはいけないことを説明することを対策としていた。

## 4. 小児看護学実習における学生の事故予防に対する意識

### 1) 事前準備

本学における小児看護学実習は、小児看護学演習を修了したおよそ4か月後から開始となる。そのため、小児看護学演習で行った課題を見直すことを実習事前課題とした。また、実習初日のオリエンテーション時には、実習目標と照らし合わせ、事故予防の視点を持つことの重要性を説明し、小児看護学演習で行った内容を改めて確認した。

### 2) 臨地実習における学生の実態

#### (1) 環境整備について

ベッド周囲の環境整備として、ベッド柵の消毒や清掃を行っているが、その際の留意点や観察項目として、ベッド内の環境やベッド柵の使用状況をあげる学生が多くみられた。ベッド内にあったオムツの袋を、子どもが踏み台にする可能性があると判断し、母親に注意を促す学生や、付き添い者がいない側のベッド柵も中段になっていた状況に対して、「お子さんがベッドから落ちるといけないので、こちらの

柵は上まであげますね」と声をかけ、ベッド柵を上段まであげる学生もいた。

## (2) 看護計画としての立案

子どもの年齢や入院状況から、ベッドからの転落の可能性、点滴留置に関連した事故抜去の可能性などを看護問題としてあげる学生が多くいた。具体的には、ベッドの使用状況やベッド内の観察、本人の状況として活気や安静度、ふらつきなどの有無の観察、訪室ごとにベッド周囲の環境整備、児および付き添い者への説明などが立案されていた。

## 5. 考察

### 1) サークルベッド使用に伴う危険予測

ベッド柵は中段のままでは危険であることを学生は認識していた。先行研究においても、入院時のベッドからの転落事故に関して、学生はベッド柵をあげることが、転落事故に対する安全対策として認識が高いことが明らかになっている(山下ら, 2014)。それに加えて、ただ単にベッド柵をあげるだけではなく、必ず「最上段まで」あげておくことが必要であると認識していることが示された。子どもの発達をとらえた事例展開をしたことで中段ではベッド柵を乗り越えようとするのをイメージできていた結果と考えられる。さらには、ベッド内の環境に着目し、踏み台になりそうなものは危険であることや、小さなおもちゃ等は外傷の危険があることに気づき、ベッド内の環境を整えることの重要性に気づいていた。ベッド柵の使用状況やベッド内の環境は、小児用サークルベッドからの転落の危険因子として挙げられており(藤田ら, 2013)、KYTを実施したことで、これらの基本的な危険因子を確認することができたと考えられる。

実習では、これらのことを踏まえた環境整備を実施することができていた。KYTを行ったことでイメージしていた内容が、実習中の子どもへの安全に配慮したケアへとつながっていたと考えられる。

病院によっては、既存の転倒・転落アセスメントシートやベッド転落アセスメントスコアシート、病院独自のアセスメントシートなどを使用してリスク評価を行い、危険度に基づき看護計画の立案を義務付けているところもあるが、学生は自身のアセスメントの結果として看護上の問題があるととらえ、計画を立案するにいたっていた。KYTを導入したことで、学生の事故予防の視点が備わってきていると考えられる。しかし、具体的に行っていたケアの内容は、ベッド周囲の環境の観察を行うことと、母親への注意喚起が中心であった。付き添い家族のストレスや疲労を軽減させることが転倒・転落の事故防止につながることも示唆されていることから(井之元ら, 2019)、注意を促すだけでなく、付き添い者の状況を十分に理解することも必要である。さらには、家族は、サークルベッド柵の印象を「かわいそう」「つめたい」などと捉えており、ベッド柵を家族が自分と児を隔てるものと認識することが、ベッドからの転落に対する危険意識の希薄につながっていることや(清水, 2015)、付き添い者の交代も転落の危険因子としてあげられている(藤田ら, 2013)。ベッド周囲の環境とともに、付き添い者の状況を観察することも重要な視点であるが、KYTでは、付き添い者が不在となる場面を設定していた。そのため、実習において付き添い者の状況を観察する視点が希薄になったことが考えられる。今後のKYTでは、付き添い者の状況についても考察できるような設定を検討していく。

また、病棟オリエンテーションにおいても、臨床実習指導者からサークルベッドの使用方法や起こりやすい事故について具体的な説明があったことも、学生の事故予防に対する認識を高める要因になったと考えられた。今年度、臨床との事前打ち合わせの際に、演習においてKYTを取り入れたことと、学生のレディネスについて教員の見解を伝え共有した。教育内容を共有し、臨床の協力を得ながら、KYTの状況設定や事故予防に関する講義内容を検討していくことも必要である。

### 2) 留置物に伴う危険予測

点滴や酸素マスクについては必要な治療である一方で、子どもの事故につながる可能性があることを学生は認識していた。輸液管理については、固定を厳密に行うだけでなく、プレパレーションと説明をしっかりと行い、子どもと家族の協力を求めることが大前提である(山田, 2017)。児の発達に合わせた説明について考えられるような演習内容も検討していく。また、固定方法だけでなく、児の活動に合わせたルートの長さも検

討できることが必要である。KYT で用いた写真では、輸液ルートが長い状況を設定していたが、そこに気が付く学生はほとんどいなかった。輸液ルートが短いと活動は制限されるが、長くなるとルートの屈曲やねじれに伴う閉塞、体への巻きつきなど、事故につながるとされる状況が発生しやすくなると考えられる。輸液管理に必要な看護の一環として、適切なルートの長さについても、学生が考えられるように指導していくことが必要である。

## 6. 今後の課題

KYT を導入したことによって、学生の実習におけるベッドからの転落事故予防に対する意識は向上していた。次年度以降も様々な状況での KYT を検討し、ベッドからの転落だけでなく、より多くの事故を予防できる視点を育んでいきたい。

また、今年度は新型コロナウイルスの感染拡大のため、個人での検討にとどまり、グループダイナミックスが発揮できず主観による学びが中心となった。実際にベッドを使用するなど、体験としての学習もできておらず、学生が療養環境を想像して学ぶことには限界がある。さらに、教員も初めての遠隔講義に対する戸惑いがあったことや、その場で指導することができなかったことから、教育方法の工夫の難しさを感じた。学生は、子どもの療養環境であるサークルベッド内での臥床や治療を受ける子どもの状況を体験することで、その場の環境や子どもの気持ち、医療者に望むケアについての学びを得ることができる(藤沼ら, 2009)。しかし、次年度以降も新型コロナウイルス感染症拡大の懸念から従前どおりの演習を行うことは困難であると想定されるため、学生の学びの質を保証できるような講義・演習を工夫し、学生の事故予防に対する意識を高めていきたい。本実践報告において、開示すべき利益相反状態は存在しない。

## 文 献

- 藤沼小智子, 田崎知恵子, 佐藤和子 (2009). 小児看護学演習における体験学習の効果 子どもの対象理解を深めるために, 日本看護学会論文集:看護教育, 39, 421-423.
- 藤田優一, 藤原千恵子 (2013). 入院している小児のサークルベッドからの転落に関する危険因子 — デルファイ法による調査 —, 日本小児看護学会誌, 22 (1), 32-39.
- 井之元美保, 田口陽子, 堀田 梓 (2019). 乳幼児の転倒転落事故に関する付き添い家族の認識・状況, 三田市民病院誌, 30, 47-57.
- 松下由美子 (2013). 看護学生の実習と安全. 松下由美子, 杉山良子, 小林美雪編:看護の統合と実践②医療安全(ナーシング・グラフィカ), 第2版, 214-218, 大阪:メディカ出版.
- 清水里紗 (2015). 小児病棟におけるサークルベッド転落防止への取り組み 患者家族の危険認識調査, 地域医療, 52 (3), 390-392.
- 筒井真優美監修 (2007). DVD 臨床で役に立つ小児看護技術 第4巻 子どもの安全を守る看護, 京都:京都科学.
- 山田咲樹子 (2017). 小児の点滴・注射確認行為, 点滴漏れ, 小児看護, 40 (8), 1035-1040.
- 山下麻実, 石館美弥子, 穴戸路佳, 久保恭子 (2014). 入院児のベッド転落を防ぐための基礎教育終了時の看護学生の安全対策, 日本看護学会論文集:看護教育, 44, 62-65.
- 一般社団法人 日本病院管理機構 医療現場における KYT の取り組み.  
<https://www.jhmo.tokyo/kytnotorikum>, 2020-12-22.